

# JAPAN/ICOMOS INFORMATION

## 第2期 第7号

平成4年2月26日 発行

### 諸報告

#### ◎ 1991年第1回理事会

日時：1991年（平成3年）10月4日（金）午後6時半～9時

会場：神田学士会館、301号室

出席者：坪井清足委員長、石井昭、伊藤延男、稲垣栄三、益田兼房、渡辺保弘  
の各理事

#### 議事

##### I 報告事項

##### 1)1991年パリ本部 Advisory Committee 出席報告（山中一郎氏）

1991年5月27・28日の両日、パリ本部にて Advisory Committee が開催された。日本イコモス国内員会からは坪井委員長の代理として京都大学教授山中一郎氏に出席して頂き、委員会の模様を書状で報告して頂いた。

同委員会では各国の年間活動がそれぞれ報告され、日本イコモスは

- ①定期的に研究会を開催し、海外協力の問題・活動等の検討を行っている
- ②世界遺産条約の批准について、日本政府に要望書を提出
- ③1993年国際イコモス総会（スリランカ・コロンボ）への積極的協力を鋭意検討中
- ④現国内登録会員数

等の報告を行った。

##### 2)1991年パリ本部 Executive Committee出席報告（伊藤延男理事）

1991年5月31日、パリ本部にて Executive Committeeが開催され、日本イコモス国内委員会からは伊藤延男理事が出席した。その議事報告は以下の通り。

- ①役員改選が行われた
- ② Executive Committeeの機構改革について

##### 3)1991年9月9日～13日にハワイ州・ホノルルで開催された「アジア太平洋地域の熱帯環境下における文化財保存シンポジウム」に伊藤延男理事・西浦忠輝委員が出席した。

##### 4)庶務報告（渡辺保弘理事）

会員の死亡と入会の報告。浅野清会員が9月に亡くなられた。1991年入会推薦

のあった各氏から入会申し込みがあり、新規に会員登録された。入会された各氏は以下の通り。

岡田保良（国士舘大学イラク古代文化研究所助教授・

連絡先；東京都町田市広袴町 844国士舘大学イラク古代文化研究所）

高瀬静昭（建築家・新日本建築家協会役員、保存問題委員会副委員長・

連絡先；東京都台東区台東1-15-8）

松本修自（奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部主任研究官・

連絡先；奈良県奈良市高畑町184 高畑合同宿舎 932号）

従って、現時点での総会員数は 123名となる。

#### 5) 会計報告（石井昭理事・渡辺保弘理事）

1991年 6月10日に、パリ本部へ1991年分会費（124名分）を送金した。

#### 6) 事業報告（稲垣栄三理事）

①1991年 2月 6日文化財工学研究所にて第1回臨時小委員会開催。議題は世界遺産条約早期批准要望書提出に関する問題。

②1991年 2月13日、「世界遺産条約の早期批准に関する要望書」を関係省庁に提出。

③1991年 3月25日神田学士会館にて第1回研究会開催。講師は宗田好史氏（国際連合地域開発センター・ナショナルエキスパート）、テーマは「東南アジアの町並み」、参加者は 9名。

④1991年 5月27日神田学士会館にて第2回研究会開催。講師は岡田保良委員、テーマは「イラクにおける考古遺跡の調査と保存」、参加者は 9名。

⑤1991年 7月 8日神田学士会館にて第3回研究会開催。講師は藤木良明委員・益田兼房理事、テーマは「アンコール遺跡」、参加者は 9名。

⑥1991年 9月11日神田学士会館にて第4回研究会開催。講師は中川武委員、テーマは「ベトナム・フエ王宮の保存問題について」、参加者は11名。

#### 7) 広報報告（益田兼房理事）

1991年第1回～第4回研究会の内容を次号JAPAN/ICOMOS INFORMATION第2期第7号で報告する。

## II 審議事項

1) 1993年国際イコモス総会（スリランカ・コロンボ）の件：イコモス会長ローランド・シルヴァ氏及び総会準備委員長バンダラナヤケ氏より、日本イコモス国内委員会に以下の4点についての協力が依頼された。

①総会前にアジアの文化遺産を中心として、各国（13か国を予定）の文化財保存に関する諸活動を簡単にまとめた冊子を出版したい。価格は20米ドル程度とし、総会出席者には配布する予定。執筆に際しては各国で担当者を決定して対応して欲しい。寄稿期限は1992年末の予定。

②総会ではメインテーマとして、アジア各国の文化財紹介を行う。発表時間は30分、そのうち20分程度をスライド説明に当てる。これに関しても発表者を

決定して対応すること。これは総会後に出版・配布される。

③経済的にゆとりのない、アジア・アフリカ諸国からの出席を促すため、合計100名分の経費を支給したい。1人当たり1,500米ドルとして、米国・日本・オーストラリア・ドイツの4か国でそれぞれ25名分ずつ負担して欲しい。つまり、総額30,000米ドル(4,000,000円弱)の負担となる。

④総会後、イコモス庭園委員会と共催で「アジア庭園シンポジウム」を行いたい。日本からの出席を是非望む。

以上に対し、日本イコモス国内委員会としては実行委員会を結成し、対応することが提案された。

2)世界遺産条約の件：日本政府が世界遺産条約に批准した場合を想定して、日本国内委員会として独自に条約の世界文化遺産リストに登録すべき候補選出を行うべきか否かを検討する。

## ◎ 1991年第2回理事会

日時：1992年1月29日(水)午後6時半～8時半

場所：神田学士会館311号室

出席者：坪井清足委員長、稲垣栄三、益田兼房、渡辺勝彦、渡辺保弘の各理事

### 議 事

#### I 報告事項

1)会計報告(渡辺保弘理事)

1991年会計収支状況の報告。

2)事業報告(稲垣栄三理事)

①1991年11月16日神田学士会館にて第2回臨時小委員会開催。議題は1993年コロポ大会への対応に関する問題。

②1991年11月16日神田学士会館にて第5回研究会開催。講師は重枝豊氏(日本大学理工学部)、テーマは「チャンパの建築遺跡」、参加者は9名。

③1992年1月18日文化財工学研究所にて第3回臨時小委員会開催。議題は1993年コロポ大会に関する問題及び世界遺産条約批准に向けての対応について。

3)広報報告(益田兼房理事)

1991年第5回研究会の内容を次号JAPAN/ICOMOS INFORMATION第2期第7号で報告する。なお、1991年第2回研究会報告に関しては、都合により第2期第8号に掲載する。

#### II 審議事項

1)日本イコモス国内委員会1991年総会の件：

2)入会推薦の件：下記7名の入会推薦があった。( )内は推薦者名。

佐々波秀彦・国際連合地域開発センター(坪井委員長・益田理事)

重枝 豊・日本大学工学部建築学科(千原委員・片桐委員)

日高健一郎・筑波大学芸術専門学群（飯田委員・渡辺保忠委員）  
前野 崑・東京芸術大学（坪井委員長・稲垣理事）  
宮川朝一・建設省土木研究課（坪井委員長・益田理事）  
宗田好史・国際連合地域開発センター（坪井委員長・陣内理事）  
柳雄太郎・文化庁文化財保護部記念物課（坪井委員長・益田理事）

### 3)1992年活動計画

- ①1993年コロンボ大会の件：スリランカイコモスより協力依頼のあった件について、日本イコモス国内委員会では実行委員会を結成して対処することを提案、具体的な人員構成、活動計画についての討議を行った。次回総会で承認を受けて活動を開始する予定。
- ②世界遺産条約の件：次回開会される国会討議で日本としての対応が決定されるため、それに伴う日本イコモス国内委員会の対応についての討議を行った。1991年 2月に既に批准要望所を提出しているため、現時点では批准に関する積極的な活動はせず、文化遺産リストの検討・文化遺産の選定基準となっているベニス憲章に対する問題提議等を行うべきであるとする。
- ③1992年日本イコモス国内委員会活動計画の件：上記①②を含んだ活動計画（会計予算を含む）の立案を行う。

### ◎お詫び

会費納入のお知らせに誤って「新入会員として」という記述がありました。また、総会の御案内では一部1991年を1990年として誤ってお伝えし、会員の方々より多数のお叱りを受けました。ここにお詫び申し上げます。

## ◎総会開催のご案内

既にお知らせ致しましたが、1991年総会を下記のように開催致します。

### 1991年日本イコモス国内員会総会

日時：1992年 2月29日（土）午後1:30～4:00

場所：学士会館分館 6号室

東京大学赤門脇（地下鉄丸ノ内線 本郷三丁目駅下車・徒歩8分）

議事内容：

#### ①報告事項

- 1)1991年活動報告
- 2)会員推移状況
- 3)会費納入状況
- 4)会計報告
- 5)執行委員会報告

#### ②審議事項

- 1)1992年活動計画
  - a)研究活動等の平常事業計画
  - b)コロポ大会に対する活動計画（実行委員会の結成を含む）
  - c)世界遺産条約に関する活動計画
- 2)予算計画
- 3)監事役員選出
- 4)会員増員に関して（法人会員等）

総会の定足数は総会員の過半数となっております。会員の皆様の多数の御出席をお待ちしております。

総会の内容は次号インフォメーションに掲載の予定です。

1991年第1回研究会

『東南アジアの町並み保存運動と  
国連地域開発センターの役割』

日時：1991年 3月25日（月）午後 6:30 ～ 8:30

会場：学士会館

1. 基調報告と問題提議(6:30 ～ 8:00)

◆東南アジアの町並み保存運動と国連地域開発センターの役割

宗田好史（国連地域開発センター）

2. 討論(8:00 ～ 8:30)

◆概要

宗田氏は法政大学建築学科の出身で、イタリアに留学して町並み保存の研究をされ、また日本での都市開発や町並み保存にも関心が深く、国連地域開発センターでは、東南アジアを中心に世界各地での仕事に活躍されている国際行政官ある。今回は、下記のレジメのように、爆発的人口集中など、現在大きな問題となっている東南アジアでの大都市の開発と保全の状況と課題を分析し、そのまちづくりの一つとして、日本の住民参加の町並み保存手法などを評価し、国連地域開発センターの活動を通じての、豊かな地域社会づくりの開発計画の可能性を論じられた。インドネシアの大都市の中のカンポン集落など、豊富なスライドを用いて東南アジアの状況を紹介された。

◆概説

国連地域開発センター(United Nations Centre for Regional Development 略称 UNCRD 佐々波秀彦所長)は、開発途上国内における地域開発計画の策定と、その実施能力を啓発するため、国際連合と日本政府との協定により、1971年に名古屋に設立された。その主な活動の目的は、

- 1) 開発途上国の地域開発に関する研修及び調査研究を行う。
- 2) 開発途上国からの地域開発に関する助言要請に応える。
- 3) 地域開発計画に関する情報交流体制を確立する。
- 4) 地域開発計画に携わる関係諸機関への援助・協力を行う。

の4点である。

1990年の活動としては、毎年恒例の第18回総合地域開発計画研修コース（60日間、22か国、30人参加）を始め、①都市・住宅領域では、「アジア大都市の保全と開発」調査研究でジョグジャカルタでの研修ワークショップ、上級行政官を対象とする第2回国際居住環境改善研修セミナー等、②情報システム領域では、クアラルンプルでの国際専門家会議「1990年代の地域計画－地理情報システムの利用と管理」等、③地域経営領域では、ジンバブエで上級計画担当者を対象とする「東及び南アフリカ諸国における自立的発展の可能性」セミナープロジェクト等、④環境管理領域では、岡崎市での「水質改善に焦点を当てた河川湖沼流域管理に関する研修セミナー」等、⑤地域防災領域では、「バングラデシュでの住民参加による地域防災管理への総合的なアプローチ」ワークショップ等、⑥社会開発領域では、トンガでの「南太平洋島嶼国における地域総合開発」専門家会議等、⑦産業開発領域では、マレーシアでの「アセアン諸国における産業構造の変容と地域開発」セミナー等がある。また、情報交流のための出版物として、5種の定期刊行物のほか、上記の各種会議やセミナーの報告書類、外国人講師等のワーキングペーパー（例えば「地方分権政策の推進と地域開発」等）を刊行している。

以下、宗田氏の用意されたレジメを掲載し、概説に替える。

はじめに：国連地域開発センターとは その活動と組織

#### 1. アジア大都市の開発と保全 国連地域開発センターの研究研修事業

- (1) 居住問題からの展開：サイトアンドサービス方式からボトムアップ型へ  
貧困な居住環境の改善は、60年代から始まる住宅用地整備や水道供給等の基礎的な整備方式では限界。85年の国際居住年から見直し。
- (2) 国際会議とワークショップの成果：地区計画的手法と住民参加の方式。中国やインド等6か国で始まっている。
- (3) 1989年・89年度のジョグジャカルタ：ソーシャルリンケージとしての町並み保全。
- (4) 今後の課題：ソーシャルリンケージへの取り組み
  - a 職住併存方の地区：経済活性化と自助努力の引き出し
  - b コミュニティ参加型方式の確立：住民レベルでの居住環境管理運営・計画能力の向上
  - c 文化的な独自性の確立：町並みと一体となって残る地区の保全、計画的なまちづくりの手法
- (5) 2つのプログラムの実施：参加型地区計画への取り組みと伝統的建築群の保存技術確立のための研修事業。技術的な限界の克服は、日本やイタリアの実践を活かす

#### 2. アジアにおける町並み保存運動の展開とその支援策

- (1) 町並み保存運動の実情
  - a 行政指導型の町並み保存（国・自治体・海外援助・その他）

- b 市民参加型の町並み保存運動（ASEAN NATIONAL TRUST 運動、CIVIC TRUSTの運動、日本との関連） アジア、特に東南アジアでの町並み保存運動の問題点、市民社会、民族問題、政治問題
- c 日本国内のアジアへの取り組み：アジアとの関連で何ができるか。文化庁、大学、国際機関等。

### 3. 今後の町並み保全への課題

- (1) 開発問題と町並み保全：貧困の問題、大都市問題、経済開発問題。
- (2) 町並み保存を通じて、日本は何を貢献できるか。

#### ◆ 討論

討論は、時間の関係で十分できなかつたが、スライド等については質問も多く、活発な研究会となった。地域社会の形成過程での文化遺産の果たす役割など、広範な問題を扱っており、大きな課題を提起されたものといえる。

以下、若干の感想を記せば、国連地域開発センターの活動については、これらの種々の内容が、日本の町並み保存事業を行っている各地方自治体ではまさに必要としているものであることに驚かされた。日本の町並み保存が直面しているのは、まともで総合的な地域開発計画とその実行が不在であることによる困難であり、現在町並み保存に関わる我々が必要としているのは、まさに「国連地域開発センター」の日本版なのだ、と痛感させられた。

◎1992年第2回研究会・『イラクにおける考古遺跡の調査と保存』  
(岡田保良・国士舘大学イラク古代文化研究所)  
につきましては、都合により、次号インフォメーションに掲載致します。



1991年第3回研究会

『アンコール遺跡』

日時：1991年7月8日（月）午後6:30～8:30

会場：学士会館

1. 基調報告と問題提議(6:30～8:00)

◆保護状況について

益田兼房

(文化庁文化財保護部建造物課技官)

◆劣化状況について

藤木良明

(上智大学アジア文化研究所客員研究員)

2. 討論(8:00～8:30)

◆概要

アンコール遺跡はカンボジア国西北部のシェムリアップ州に位置する、クメールの代表的な遺跡である。9世紀から13世紀に栄えたクメール王国の王都跡として知られ、中心部分だけでも約200平方キロメートルの範囲に及び、主要な遺跡だけでも60を超える巨大な複合遺跡となっている。遺跡の修復保存は1908年のフランス極東学院アンコール事務所の開設以来、ポルポト時代を除いて各国の協力のもとで継続してきており、日本は上智大学の学術的協力交流を中心に保存活動に参加している。各国の様々な試みにも関わらず、熱帯の自然条件やカンボジアの厳しい国内情勢などにより遺跡は依然として危機的な状況にあり、早急な対策が叫ばれている。そんな中で1991年、日本では上智大学アジア文化研究所、財界・学識経験者が中心となってアンコール遺跡救済委員会が組織され、今後の保存修復にリーダーシップを発揮すべく活動を開始した。

益田氏はアンコール救済委員会の第1回現地調査に参加され、遺跡の保護状況についての報告をまとめられた。また、藤木氏は上智大学アジア文化研究所の現地調査に参加され、遺跡の劣化状況についての報告をなされた。以下にその概略を記す。

◆保護状況について

益田兼房

氏は1991年4月29日～5月2日の現地調査においてアンコールの主要遺跡の幾

つかと、現地保存事務所、美術館などを見学され、現地の状況に感想を交え、スライドを用いて概説された。

遺跡は熱帯雨林性のジャングルに取り巻かれており、歴史的想像力を喚起するに相応しい巨木も多く、一種の自然公園といえる景観を構成している。この遺跡はカンボジア国民の誇りであると同時に政府にとっては国内最大の観光資源でもあり、適切な形で保存は強く望まれている事である。

しかし、遺跡周辺の自然環境の中には遺跡破損の原因となる要素も多く、また、急激に観光地化されることによって周辺環境が破壊されることにもなりかねない。また、現在地表に現れている遺跡はすべて石造または煉瓦造のものであるが、これは往時のアンコール文化全体像のごく一部に過ぎず、木造の宮殿や住宅、様々な生活文化をしのぶ手掛りが遺跡周辺の地中に埋蔵されている可能性が高く、無秩序な乱開発から保護せねばならない。更に、国内で長期にわたって継続していた各政治勢力間の武力闘争は看過できない悪影響（保護政策の遅延、美術品の不法輸出等）を与えており、早急に総合的な保護及び開発計画の立案が必要である。

それと同時に、修復・保存に関わる人材養成や、効果的な保存技術の研究、本格的事業に先立つ基礎的調査、アンコール保存事務所機能の強化、崩壊進行の深刻な部分の応急対策等、様々な問題が考えられる。

#### ◆劣化状況について

藤木良明

氏は上智大学アジア文化研究所客員研究員として現地調査に参加されているが、今回は1990年8月、12月、1991年3月に行われた現地調査の結果を、遺跡の劣化状況を中心としてスライドを用いて報告された。

遺跡は砂岩（大きく3種に分類できる）・ラテライト（紅石）・煉瓦によって構成されるが、それぞれの素材はその耐久性に差があり、更に加工法による耐久性の差異も見受けられ、それぞれに合った保存方法を選択せねばならない。また、熱帯雨林地方特有の多雨気候によって地盤の不同沈下による倒壊、毛細管現象による石材の溶融、界面剥離現象などが引き起こされ、そこに地衣類や生物による腐食、樹木による破壊など、その対策は多種にわたる。応急的な処理は現在為されているが、それですら現状を維持できる状態ではなく、厳しい自然条件下での長期的な対策は未だ研究段階にある。

今世紀初頭にフランス極東学院によって為された修理は基本的には応急的なもので、倒壊寸前の遺跡をコンクリートや鉄のかすがいで補強したものとなっているが、半世紀を過ぎた現在、補強材自体が激しく劣化しており、かえって遺跡の破損を助長している部分さえ見受けられる。また、これらの修復はコンクリートの巨大な梁を露出させるなど遺跡の景観を著しく損なうものも多く、対応策の立案が急がれている。

現在の遺跡の状況は個々の応急策で対応しきれものではなく、地盤整備や自

然環境整備をも含めた抜本的な対策が必要とされている。また、熱帯雨林地方における石材の保存対策研究も急務であり、日本の金銭的・技術的協力は各国から望まれているといえよう。

#### ◆討論

以上の発表を受けて行われた討論では、我々にはあまり馴染みのないメール建築についての質問が多く為された。宗教と建築との関係や上部架構の処理、想定される木造建築についての討論が行われた。同時にフランス極東学院の層の厚い研究体制にも触れ、日本に於ける該当研究機関の設置に対する意見も提出された。

いずれにせよ、遺跡保存のイニシアティブはカンボジア国民に任されることになるが、研究者や技術者の養成に積極的に協力することや木造建造物に対する豊富な知識を役立てるという点で、日本の果たす役割は資金援助は勿論のこと、技術的援助の面からも非常に重要であるということができよう。

#### ◎報告

報告者：益田兼房

### 1991年第4回研究会

#### 『ベトナム・フエ王宮の 保存問題について』

日時：1991年 9月11日（月）午後 6:30 ～ 8:30

会場：学士会館

#### 1. 基調報告と問題提議(6:30 ～ 8:00)

◆ベトナム・フエ王宮の保存問題について

中川 武

(早稲田大学理工学部建築学科教授)

#### 2. 討論(8:00 ～ 8:30)

## ◆概要

中川氏は1991年6月から7月にかけてユネスコの調査依頼を受けてフエ市を訪問された。王宮の保存の状態、現地技術者の状況などを見学され、その際の記録を豊富なスライドと感想を交えて報告して頂いた。以下にその概要を記す。

ベトナムの首都ハノイの南方 700キロメートルに位置するフエ市は、19世紀初頭から1945年まで13代続いたグエン王朝の首都であり、ベトナムの京都ともいうべき古都である。また、南シナ海に近く、水清らかな香河や美しい山野の景勝の地としても知られている。フエ市中心部、旧市街に当たる部分は南側を香河に接して城壁で囲まれた城下町であり、その南側の一角に王宮跡が残っている。都城の城壁、門、堀などはほぼ現存しており、王宮内には30棟余りのレンガ壁を持つ瓦葺・木造の主要建造物が保存されている。また、市の南方、香河に沿って歴代国王の墓廟（王の在命中は離宮として使用された）が点在し、美しい景観を誇っている。

ベトナムは有史以来、中国を宗主国としてその文化を築いてきた。従って建築様式、装飾様式は中国のものに非常に類似したものとなっている。しかし18世紀末から19世紀初頭にかけて国内に乱が相次ぎ、その中から生まれたグエン朝はその成立の時からフランスの保護を受けており、その影響は様々な調度に見ることができる。特に、グエン朝最後の王、バオ・ダイの墓廟は西洋風の庭園や宮殿を残している。そのいずれもが西洋風の様式の上にベトナム独自の装飾を過剰なほどに施したもので、その美術的価値は高い。しかしながら、その後のベトナム戦争でこの地も激しい戦火に晒され、かなりの建造物が廃墟と化しており、やっと政体が安定した現在は、ベトナム人の心の故郷ともいうべき古都をより良く保つために、多くの現地技術者・研究者が保存・修復に取り組んでいる。

今回の調査で主対象となった午門は、王宮の朱雀門に相当するもので、北京の紫禁城の午門を写したものである。紫禁城に比べ規模が小さく、その結果偉容あたりを払う、というよりは、平等院鳳凰堂を思い起こさせるような軽快で美しいものとなっている。この建物には幸運にも戦火は及んでいないが、その構造的な特質ゆえにどんどん劣化しているのが現状である。

午門の構造形式は中国の明～清時代に形成された非常に簡略なものであり、登り梁の多用、屋根の懐が浅く、勾配も緩く軒の出が浅いといった特徴を持つ。また、屋根の繋ぎ部分が谷間となってしまう、雨の少ない中国北部の気候でこそ保持できるが、熱帯雨林に属するベトナムの気候では、雨仕舞の点で、致命的な欠陥を有しているといえる。更に、紫禁城午門の規模を縮小して写した結果、屋根の納まりに無理が生じ、屋根の繋ぎ部分の谷間に雨滴が集中するという事態を引き起こし、そのため天井裏では腐敗が進行しており、同時に軒が浅いために壁面や柱が風雨に晒され、劣化は激しく進行している。また、軒桁を支えるのは斜めに柱に挿した挿し肘木様の部材で、屋根荷重に比して柱間が広すぎるために軒を支えきれず、垂れてしまっている。また、一部柱脚が基壇面に埋めこまれる形と

なっており、柱の根腐の原因となっていること、仕口の精度が粗く、そこから材の劣化が進んでいることなど、多くの問題点が挙げられる。これらの問題は午門に限らず、他の全ての建造物に共通するものであり、フエの歴史的建造物の保存において深刻な問題となっている。

現在、現地技術者及び研究者によって、継続的な小修理と、柱上部を鉄輪で固め、4方をワイヤーで引っ張るという応急対策が為されている。しかし、ワイヤーやハイ・テンション・ボルトを多用する修理は建造物の外観を損ねる恐れがあり、基本的に欠点を持つ構造形式をカバーするには至らない。雨仕舞をよくするために、日本の野屋根のような、雨に強い構造を導入することも考えられるが、ベトナムではそれに相当する手法が考案されておらず、不用意に構造を改変してしまえば伝統様式の破壊にも繋がる。雨を避けるために覆屋を建てて困ってしまう方法もあるが、これでは現在の開放的な美しい景観を著しく損ねることは明らかであり、歴史的景観の保持という点で避けるべき方法である。いずれにせよ、現在行われているような応急修理のみでは建造物の劣化が進行するのは避けられず、何等かの形での抜本的な修理方策が必要とされている。

一方、現地では建造物の保存と共に、技術の保存・活性化に積極的に取り組んでおり、王宮内に工房を作り、瓦の製造、陶器を用いるモザイク装飾、漆工法の維持及び技術者の育成が行われている。また、王宮内の整備に多くの地域住民を雇用しており、従来の生活と環境の継続にも注意が払われている。これは王宮周辺の土地に多くの人々が居住し、耕地や市場が見られる現状にも見て取ることができる。ベトナム側の王宮に対する感覚は、観光資源というよりは民族的な誇りとしての意味が強いようである。

しかしながら予算の不足は否めず、また損壊の進行が早いこともあって、思うように修理ははかどっていない。1990年4月付けで日本政府より10万ドルの援助金支出が決定したが、支払いが未だ滞っており、ベトナム政府は銀行借金によって当座をしのいでいる状態であり、早急な入金を望む声強い。現在のベトナムは経済的に困難な状況に置かれており、他国からの金銭的援助は必要不可欠なものであるといえよう。

いずれにせよ、本格的な保存修復は今後の事業に拠らざるをえず、その際には周辺地域をも含めた総合的な開発保存計画が必要となろう。また、建造物の抜本的な修理方針の立案、現地専門職のトレーニング等、今後の課題は多々在り、その中で日本に期待されることは多い。金銭的援助のみならず、日本が長年培ってきた木造建造技術、多雨気候の中での彩色技術など、日本の果たすべき役割は非常に重いものであるといえよう。

#### ◆討論

以上の発表を受けて行われた討論では、日本では余り紹介されたことのないベトナムの建造物についての質問が多く為された。また、基本的に欠陥のある構

造に対する修復保存の方法についても多くの意見が提出され、活発な討論が行われた。修復保存に関する技術的な問題、経済的な問題共に、以下に多くの選択肢を設定できるかが今後の課題となるという点で、意見の一致を見た。特に経済的な問題に関しては、日本の果たす役割は大きくなるだろう。

◎報告

報告者：益田兼房

1991年第5回研究会

『チャンパ遺跡の  
現状と保存計画』

日時：1991年11月16日（土）午後 6:30 ～ 8:30

会場：学士会館

1. 基調報告と問題提議(6:30 ～ 8:00)

◆チャンパ遺跡の現状と保存計画

重枝 豊

(日本大学理工学部)

2. 討論(8:00 ～ 8:30)

◆概要

重枝氏は1990年からハノイ歴史研究所及びベトナム文化省の協力を得て、チャンパ遺跡の現状調査、保存・修復活動を行われている。今回はこれまでの調査結果と現在の状況、今後の展望について、チャンパの聖地であるミーソンの遺構群を中心に、豊富なスライドを用いて報告して頂いた。また、ラテライト（紅石）の切り出し現場など、なかなか見ることのできない貴重な資料も提出して頂いた。以下にその概要を記す。

チャンパ（中国史料では年代によって林邑、環王、占城と呼ばれる）は2世紀末から15世紀末にかけてベトナム中部に栄えた王国で、その中心部はフエ市の南方、かつて東南アジア最大を誇った貿易港の一つであったホイアン・王都チャキユウ・宗教的聖地ミーソンという、東西にほぼ一直線上に並ぶ3つの核によって

構成されていた。領土的には4世紀頃に全盛期を迎えるが、その後、中国やキン族（越南）、アンコール（真臘）の相次ぐ圧迫を受け、王国は次第に縮小しながら半島を南へと下っていき、15世紀には国家としては滅びた。現在ではチャム族（チャンパを建てたインドネシア系民族）は中南部ベトナムからカンボジアにわたる地域に少数民族として居住している。中国とインドに挟まれて様々な影響を受けながら独自に発展したチャンパ文化の持つ複雑さは、東南アジアの錯綜する歴史を象徴していると言えよう。

チャンパの歴史はほとんど全てが南下の歴史と言っても過言ではなく、王国の中心部も国の移動に従って次第に南下していくが、その中において唯一、宗教的中心地であるミーソンだけは、13世紀末まで放棄されることなく存続していた。既に他国の支配下に置かれた地でありながらも、宗教的建築物の建造は継続して行われていた歴史的事実は、チャム人にとってミーソンが如何に大切な都であったかを示唆している。

現存するチャンパの遺跡は大きく分けてミーソンを除く北部、南部、ミーソンの3つに分類することができる。北部の遺構は平坦地に建設され、スケールも大きく、一方南部の遺構の多くは高台の上に建設され、他の地域とは異なったプロポーションを持つ。ミーソンのものは北部の遺構と類似した形態を持つが、平坦地に集中して建設され、比較的小規模なものが多い。材質は焼成煉瓦が主体でその整形は荒く、積み上げながら誤差を修正していったものと考えられ、従って目地は非常に複雑である。開口部上部はコーベルアーチで支えられ、まぐさには砂岩を用いて構造的な補強を加えている。壁体の煉瓦積みをもそのまま仕上げ面とし、表面には精巧なレリーフが施されていた。全体の形態やレリーフはクメールやジャワの造型に類似しており、強い影響関係を思わせるものである。

美術的にも技術的にも優れた遺構ではあるが、現在は無残に崩れ落ちてしまっているものがほとんどである。熱帯の厳しい自然条件下では煉瓦造建造物の維持は容易ではなく、15世紀に王国が滅びて以降、忘れられ打ち捨てられていれば尚更であろう。多雨気候であるが故に建物の足元の腐食が進行し、倒壊寸前の遺構は多い。また、コーベルアーチの持つ構造的な弱さが原因となって壁に亀裂が入り、屋根を支え切れずに倒壊したものも多く、中にはベトナム戦争時に軍事基地として使用されたために爆撃を受け、完全に破壊されてしまったものもある。かつての面影はかろうじて想像できるものの、全ての遺跡が完全に倒壊してしまうのはそう遠い未来ではない。

そういった状況を受けて、ベトナム文化省・政府文化財修復センターが中心となり、調査・修復活動が1981年より開始された。その際にはポーランドPKZの技術協力が仰がれ、応急修復を前提とした調査活動と、それに基づく応急的修理が行われた。しかしこの調査・修復はあくまでも応急対策を主眼としていたが故に復元的考察や編年構成等の研究は深く行われず、多くの問題点を抱えたまま進化した。1991年からはベトナム政府修復センターが単独で作業を継続しているが、

その方法には疑問点が多く挙げられている。一方、現在までに行われた本格的な学術調査としては、20世紀初頭にフランス極東学院によってなされた優れて詳細な報告が挙げられるものの、若干の疑問点も見受けられ、再評価が必要とされるべきものである。

従って現時点での急務とされることは、基礎研究の充実、煉瓦造建築の修復手法の検討、現地研究者・技術者の育成が挙げられるが、何よりも効果的な遺跡修復・保存活動の実践を支える、充実した支援体制の早急な確立が最も必要とされているものであろう。

#### ◆討論

以上の発表を受けて行われた討論では、日本ではほとんど紹介されたことのないチャンパの建造物についての質問が多く為された。同時に構造的に類似する特徴を持つアンコールと関連した討論も活発になされた。チャンパの建造物は日本にはあまりにも馴染みが薄く、修復保存技術的な指導力は現時点では望めぬものの、アンコール遺跡調査との連帯によって多くの成果が挙げられることは十分予想される。また、現在のチャンパ遺跡の抱える悪状況の多くは金銭的な裏付けがあれば解決可能なものであり、この面に於いては日本は積極的に協力すべきであらう。

#### ◎1992年第1回研究会・「ブルガリアの文化遺産の保存」

(ルユドミラ・マルコヴァ・ブルガリア国立文化遺産研究所)

は、1992年2月22日に開催されました。報告は次号インフォメーションに掲載します。